

經濟論叢

第八十六卷 第二號

労働市場論なき賃金論……………	岸本英太郎	1
ブルック・ファーム……………	穂積文雄	19
イギリス革命における農業・ 土地問題分析の視角……………	尾崎芳治	47
社会科学のひとつの立場……………	出口勇藏	61
《記事》 昭和三十五年度京都大学経済学会大会における公開講演 および研究報告の要旨……………		74

昭和三十五年八月

京都大學經濟學會

記 事

昭和三十五年度京都大学経済学会大会における
公開講演および研究報告の要旨

(昭和三十五年五月三〇・三一日)

〇 公開講演

アメリカ経済と経済学

中 谷 実

伝統的な経済学は、すべてその時代の経済生活と思想とに根を下していたのであって、アメリカにおいても、その例外があるわけではない。

思想の面や国際的な関係は、ここで深く立入らないが、まず、アメリカ資本主義は、一九三〇年代から著るしい変革をとげてきたといわれる。そして、ニュー・ディールそのものにおいて、すでに、一面では社会化の進行と他面では独占集中の進展とが、特徴づけられていたのであった。第二次大戦後は、まず、技術

の進歩・生産力の増大に見合うところの消費の増加を基盤とした経済発展が、かなりの程度に成功をおさめたのであるが、それには、所得革命とか人民資本主義ということばが流行したように、所得の平準化が織込まれた所得水準の上昇とともに、消費者信用の発達が大きな貢献をしたと考えられている。しかも、この段階においては、成長率よりも安定に重きがおかれたのであって、制度的にはビルト・イン・スタビライザーがとり入れられ、寡占産業においても、安定した収益をねらう管理価格制が支配した。同時に、各種産業間における生産性上昇の差異にもかわらず、一律な賃上げは、ビルト・イン・インフレーションとなり、他の諸要因と競合して、「忍びよるインフレ」を起したのであった。かくて、最近になると、右のような「安定」の要素がその重みを減じて、むしろ成長率の大きさが、関心事になったように思われる。

こうしたアメリカ経済の推移は、その経済学にも大きな影響を与えているのであって、その一般の特徴は、経済成長論の盛行にこれを見ることができるといえる。しかも、安定から成長への推移は、安定した技術や産業構造を前提とする産業連関分析等にも影響を及ぼし、そこにおける、各種生産要素間の代替関係を問題にし、技術係数の固定性を批判するような傾向も表われた。また、アメリカ経済学の分野は極めて広範囲にわたって、ここではその例示を省くが、研究方法において、統計的、実証的方法が

一般に広く用いられるのも、現下の経済情勢にもとづくものと
考えられるのである。

(京都大学教授)